

## 千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第67号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

## ニュージーランド オークランド市が面白い

伊東 理

## Contents

Page 1 .....

巻頭言  
ニュージーランド  
オークランド市が面白い  
伊東 理

Page 2 .....

春の一泊巡検報告  
土山・関・伊賀上野  
梶原千朝美

Page 3 .....

学窓から  
日本に留学した私の感想  
TRAN Thi Mai Hoa

今後の研究会行事

Page 4-5 .....

研究ノート  
浜松敬子と産業地域社会の  
関係性に関する予察  
齋藤祐子

Page 6 .....

卒業生だより  
欲張りであれ、  
鈍感であれ  
中村慎一

卒業論文・修士論文一覧  
(2012年3月卒業・修了生)

Page 7 .....

教室だより

Page 8 .....

随想  
地理学の経験を活かす  
一メビック扇町の現場から  
堂野智史

新入会員より

Page 2-3,6-7

新院生紹介

Page 7

本年の1月から3ヶ月、ニュージーランド(以下、NZと略す)のオークランドで資料収集してきました。オークランドは日本では馴染みの薄い都市ですが、実に面白い都市です。オークランドの面白さについて書くこととします。

[NZの将来を決めるオークランド] NZは、その人口が約470万人で、福岡県の人口より20万人ほど少ない国です。NZで唯一の大都市オークランド市の人口は145万人で、国の人口の約30%を占めています(2010年)。1990年代後半以降、人口や各種の経済活動のオークランド大都市圏への一極集中化が進展してきましたが、それは農林水産物の生産や消費材工業を中心に発展してきた国の伝統的な産業構造をソフト産業、サービス産業、観光業、大学などの成長産業部門の育成・発展によって、新たな産業構造に転換を図る国家戦略を牽引してきた都市がオークランドであるためだと理解されています。NZにおけるオークランドの重要性は今後ますます増加し、その行く末がまさにNZの将来を決めることとなるものといわれています。オークランドの今後が注目される所以です。

オークランド大都市圏の急速な成長は、交通・住宅、開発用地の確保、環境保全、成長管理といった大都市圏レベルでの地域的対応や計画・開発を必要とする多くの課題を生んできました。そのため、これらの課題を総合的、効率的かつ強力に解決していくためには、大都市圏全域を一つの地方自治体(基礎自治体)とするのが望ましいものとして、2010年11月に4市3郡が合併して地元では「スーパーシティ オークランド」と呼ぶ現オークランド市が発足しました。大都市圏域がイコール唯一の基礎自治体というのは、恐らくはこのオークランドが世界で最初であり、一つの壮大な実験都市といってよいでしょう。また、大合併以降、2年足らずで都市計画、経済計画、社会計画等、スーパーシティに対応した新たな計画や開発の理念などが次々と提起・策定されてきています。まさにホットなシティです。

[壮大な開発計画、成長戦略、そして人] ヨーロッパ都市を筆頭に、世界の先進国都市では、都市再生や人口減少社会に対応した都市のダン

サイズ化が課題となっているのに対して、オークランドでは2040年までに100万人の人口増加を図り、高度な経済成長を遂げることが目標とされています。そのため、約20年で40万戸の住宅を建設するほか、公共交通の再整備等の各種のインフラ整備が目白押しです。多様な開発手法の導入も面白いのです。

また、経済・都市産業の発展を図るためには、高学歴、高度な技術・技能を有する人材の養成・確保が大きな課題とされ、NZ生まれの大卒者がNZ以外の国々に多数流出する現状を食い止めて、さらに海外からの有能な人材の流入を図っていくこと、将来を担う子供達に対する教育投資を増やし教育水準を高めて高度な人材育成を図ること、など人材の確保・育成を重視する諸政策を展開しようとしています。実際にアジア系留学生が学生数の半数近くを占めるオークランド大学ではアジア系留学生のNZ企業への就職も多くみられ、NZ定住を目指して真剣に猛勉強する留学生も少なくありません。

こうした政策の成否は海外からの優秀な人材や移民の受け入れ・定着が上手くいくかどうかにあります。そのためには、オークランド市が人々にとって魅力的な都市であることが重要となります。2006年のオークランド市人口の民族構成は、ヨーロッパ系=55%、マオリ=10%、太平洋の諸島民Pacific Islander=15%、アジア系=20%で、2040年にはヨーロッパ系=40~45%、マオリ=10%、太平洋の諸島民=15~20%、アジア系=20~30%となるものと予測されています。このように、ほどなくヨーロッパ系民族がオークランド市人口の半分以下となることも関連して、多民族共生社会、社会的包摂コミュニティの実現が魅力的な都市社会を築くことに繋がる重要課題と認識されています。

そこでオークランド市では、(さまざまな垣根を越えて)「共に生きる」"Living Together"をスローガンにした住みよい世界都市Livable World Cityを目指した各種の地域政策や社会政策が実行されてきています。太平洋の諸島民およびアジア系の人々がヨーロッパ系人口を上回る都市という現実を抜きにしては、オークランドやNZの将来はないのです。現在、オークランドが目指す都市像や将来像、計画理念などは比較的明確にされていますが、それを実現する具体的な政策・施策の確立・実行、さらにはそれらの効果や地域(社会)の変化の検証などは、これからのことです。そこが私には面白いのです。

(本学教授)

相澤なつ乃  
アビールポイントは学籍番号です。文化にすごく興味があります。音楽が好きです。パソコンと鳩がとても苦手です。よろしくお願ひします。

赤田夕姫  
はじめまして。兵庫県神戸市出身です。高校の時から環境に興味があったので地理学専修に進むことにしました。地理関係の知識がほとんどない私ですがよろしくお願ひします。

池内啓介  
元々環境や地理に興味があり、地理学専修に入りました。これからよろしくお願ひします。

王毅日向  
大阪府池田市出身です。2回生から自転車通学しています。大学生のうちにいろんな所へ行ってみたいです。よろしくお願ひします。

奥村早紀  
出身は大阪府和泉市で、出身高校は住吉高校です。自分が勉強したいことが地理学だったので進みました。スノーボードが好きで毎年行っています。よろしくお願ひします。

川勝雄輔  
大阪市の天満に住んでいます。昔から少し地理に興味がありました。たまに自転車で少し遠くまで行ったりします。ちなみに体育会バレーボール部に所属しています。

久保美佳  
大阪府岸和田市出身です。かなりのんびり生きています。今行きたいところはフランス、バンクーバー、オーストラリアです。他の場所にも行ってみたいので、どっか行く時は是非連れて行って下さい。

後藤結実  
東大阪市出身です。絵や歌が好きです。旅行が好きです。よろしくおねがいします。

酒井啓裕  
和歌山県出身です。まだ、具体的に何を勉強したいか決めていませんが、地理は沢山のことが学べると思うので、一つ一つの授業を大切にしたいです。今は少し環境問題に興味があります。

私たちは2012年5月26・27日、三重県の伊賀・亀山方面に一泊巡検に行ってきました。「自然・農業」「歴史・観光」「統計」「産業・交通」の4班に分かれて、事前に下調べをして巡検に臨みました。

26日朝、新大阪駅から大型バスで出発。天気にも恵まれ、二日間を通して快晴でした。

名神高速道路に入ったところから、事前に調べたことについての発表が順次行われました。そして、私達はまず土山でバスを降り、一面の茶畑で下調べした発表と野間先生のお茶についての解説を聞きました。お茶の種類や成り立ちについての解説はとても興味深かったです。お茶といえば静岡のイメージが強すぎるためか、滋賀や三重に茶畑があるという事実は新鮮でした。

続いて、土山宿と関宿を訪れ、趣がそれぞれ異なった歴史の面影を感じさせる東海道の街道景観を楽しみました。土山宿の東海道伝馬館では実際に籠に人を乗せて持ち上げるなどの体験もしました。関宿では昼食を頂いた場所の近くに足湯があり、特に2回生にはそれが好評だったようです。その後、バスは亀山・関テクノヒルズに向かい、シャープなどの工場群を見学しました。日差しが強かったこともあり、バス内からの見学になりましたが、ひとつひとつの工場の大きさに圧倒されました。そして鈴鹿市の農業地帯に至り、バスを降りて街路樹でおなじみの三重サツキの幼木と茶畑が広がる中、野間先生が先陣を切り私達がそれに続く形で、いわゆる日本版カナートであるマンボを探し求めて

歩きました。十数分歩いた後、ついにマンボが見つかった時には何とも言えない感動がやってきました。また、一面に並ぶ小さなサツキはまるでミニチュアの森のようでとっても印象的でした。

最後に1泊巡検の宿泊地となる伊賀上野市に着きました。まず伊賀くみひもセンターに行き、同センター内で組紐についてのビデオを鑑賞しました。そしてバスは市街地に入り、伊賀上野城を登って石垣の上で城郭や石積みなどの説明を受けました。こうして1日目の活動を終え、2回生はそのままバスで大阪へ。私達は市街地を抜けてサンピア伊賀に宿泊しました。宿は綺麗で、お風呂も大きくすごく良いところでした。夕食はとても美味しく、その一番は伊賀焼の釜による釜炊きのご飯でした。

2日目は上野市駅までバスに乗り、そこから徒歩で城下町の地図や観光地図をみながら現在の市街地をみて回った後に、城下町の藩校の遺構である旧崇廣堂を見学して解散しました。

今回の巡検を通して、知らないがゆえに見るべきものが何もないと思ひ込みがちな地域でも、実際に調べてみることで多くの発見があること。またその地域を実際に訪れることで関心が深まったり、地域の実感が得られたりすることなど、とっても良い経験をする事ができました。特に事前調査の大切さが、身に染みしました。この経験を大切に、秋の調査も頑張りたいと思っています。

(本学3回生)



伊賀上野旧崇廣堂前にて

## 学窓から

## 日本に留学した私の感想

TRAN Thi Mai Hoa

日本に留学した私の日本での思い出を聞かれたら、複雑な感想がある。

すでに来日から3年間が過ぎさったが、来日した当日の印象はいまも鮮やかに記憶に残っている。発展途上国から3月に日本に着いた私は、早朝の寒さに震えながら駅で待つ間、立派な服装で疲れた顔をしてせかせかと歩いて駅に出たり入ったりしている日本人の人々を見ると、「先進国はそうなんだ」と思った。

でも、日本に住めばすむほど、日本人の温かい心がわかってきた。どこで調査しても、熱心な人々に出会うことができた。どこに行っても、やさしく世話していただいた。お正月に日本人の家でおせち料理をいただきお年玉をもらうなどの経験もした。お茶会での手伝いや禅寺での座禅など貴重な機会にも恵まれ、豊かな精神生活をもった日本人を肌で感じる事ができた。日本は形式だけの「義理の社会」ではなく、お世話好きな暖かい社会だということがわかってきた。日本でお世話になった思い出は決して忘れることはないだろう。

しかし、外国人にとって、日本の生活に関しては問題がないとはいえない。「途上国から来た外国人は日本で就職して永遠に住みたいのではないか」と考える日本人がいるが、ベトナム人の私から見るととんでもない。日本で少しでも社会貢献したいと思い、ボランティア活動に参加したいと言ったら、主催者にはお金のために参加すると思われてびっくりした。ベトナム

の高校生の私の友だちはほとんどヨーロッパ諸国やアメリカに留学したが、海外に永住したいと考える人はだれもない。一時的には故国を離れても、母国ベトナムに住むのが最も幸せだという人が多い。今年7月24日に阪大のベトナム人留学生が包丁で自分を刺したということをニュースで知った。外国人留学生たちが不安な海外生活を送っていることを日本人にも分かってもらいたいと思う。

いっぽう自分の研究活動の視点から見ると、日本は天国(Paradise)だと思う。情報が多く大学や街の設備も素晴らしい。また地方の調査で、市役所や町役場を外国人が訪ねてもたいへん歓迎された。国際学会に参加することもベトナムよりは容易だ。しかし、自分が努力しないと誰も手伝ってくれない。ベトナムという一国の発展を考えてみても、外発的な力とともに、内発的な発展が不可欠であることを私は学んだ。

学位論文で私が勧めたモデルは、ベトナム人の訓練をするために、関係者の協力と各省庁間の連携、政府の「公」としての役割が重要なことを、今回の日本の留学で学んだ。ベトナムが日本のように経済として成長して、世界からも評価される価値観をもてるような国になることを私は期待している。

(本学大学院博士課程後期課程(文化交渉学)9月修了予定)

下田省吾  
大阪府寝屋川市出身。現在は大阪市内に住んでいます。出身高校は関西大学第一高等学校です。小学校のときはサッカー、中学・高校では水泳をしていました。明るさと元気だけが取り柄です！よろしくお祈りします！

下村実咲  
大阪で生まれ奈良で育ちました。新しいことにチャレンジするのが割と好きです。地理学専修でもいろいろ頑張りたいです。

管崎のぞみ  
1回生の時は地理に関しての授業を全然とってなかったのですが、友達にすすめてもらって興味をもちました。観光に興味があります。よろしくお祈りします！

菅沼 萌  
枚方市出身で、高校は京都府です。大学では茶道部に入っています。洋楽と海外ドラマが好きで、ミュージカルも好きです。いろんな人といっぱいしゃべりたいと思っています。よろしくお祈りします。

高橋宏和  
大阪府枚方市出身の高橋宏和です。2年前からストリートダンスのアニメーションをやっています。歴史や自然が好きなので、これらに関することを勉強したいです。

徳山未紗  
兵庫県出身です。地理のことは全然分からないけど楽しみです。よろしくお祈りします。

土井千夏  
大阪府高槻市出身です。甘いものが大好きです。自然が好きなので地理に決めました。みんなで仲良く楽しくやっていきたいです。よろしくお祈りします。

中安 稔  
大学に入った時から、地理学専修にほとんど決めていました。興味のある分野は自然地理です。これからよろしくお祈りします。

永島 萌  
はじめまして。大阪府出身です。3歳からずっと水泳をしています。これからのいろいろなことを吸収して成長していきたいと思っています。よろしくお祈りします。

## 今後の研究会行事

## 関西大学地理学研究会事務局

## 1. 秋の日帰り巡検

毎年研究会の恒例行事となっています日帰り巡検を下記の要領にて実施します。多くの卒業生、院生、現役学生の参加をお待ちしています。担当は野間。

テーマ：洛北から洛中へのまちなみの推移と学区・地域社会

日時：平成24(2012)年10月28日(日)9時30分～17時(予定)

集合：京都市営地下鉄(烏丸線)鞍馬口駅(北山方向、地下の①出口付近)

コース：地下鉄鞍馬口駅→下鴨神社・糺森(世界遺産・植生)→加茂川・高野川合流点(地形)→出町榊形商店街→相国寺→同志社大学→烏丸今出川(各自付近の食堂、御所での弁当など)→仙洞御所→寺町→京都市歴史資料館→新島襄生誕地→行願寺(草堂)→御所南小学校→京都市まんが博物館→地下鉄御池駅(解散)

案内者：大学院生(M1, D1), 東出修一(OB), 上野 裕(OB)

費用：1000円前後(昼食代は各自負担, まんが博物館入館料, バス代)

その他：雨天決行。昼食は各自, 弁当または市街地の食堂。コンビニ等で現地調達も可能。

連絡先：参加希望の方は10月20日(土)までに電話または電子メールでM1所 夏弥(090-5271-5435, t-rinktackle@docomo.ne.jp)までご連絡ください。

## 2. 地理学研究会第99回例会(研究例会)

日時：平成24年12月8日(土)15時開始 18時から懇親会

会場：関西大学 第1学舎1号館(研究例会)3階A301教室(懇親会)1階食堂

報告：大学院生「静岡県島田市・川根本町の実習調査報告」

講演：齋藤鮎子「東アジアとその周縁における粉食文化研究の系譜と課題—戦後日本における研究を中心に」

：西岡尚也「地理教育の役割について考える—これまでの私の経験から—」

：伊東 理「スーパーシティ オークランドのめざすところ」



はじめに

著者の目下の研究の関心は「B級ご当地グルメ」の地域性格である。「浜松餃子」も「B級ご当地グルメ」でその特徴は図1のような餃子の盛り付け方と中央に茹でもやしを添えることである。好事家的研究に陥らない突破口として、本小稿では地域社会の関わりを試論的に考察する。浜松での聞き取り調査で分かったことは、外で餃子を食べる機会よりも自宅で餃子を食べる機会が多いということである。その理由を浜松の産業発達史から解明することを本稿の目的とする。

浜松市には三大産業と呼ばれる楽器、繊維、輸送用機器（主に自動車、オートバイ）に加え、金属製品、生産用機械器具工業が発達している。平成22（2010）年国勢調査で15歳以上の就業者総数は39万9,573人、第一次産業3.2%、第二次産業35.2%、第三次産業60.5%である。他の政令指定都市と比較して、第二次産業の割合が極めて高い。製造業が集積する日本有数の「ものづくりのまち」として、東海工業地域の中核を担うとともに、各業種が相互連関する産業地域社会を形成してきた。

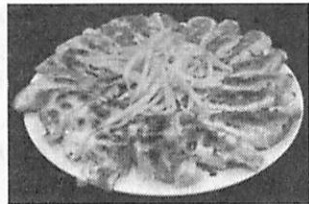


図1 浜松餃子

産業都市として発展史

浜松市の産業都市としての発展は、綿織物に端を発する。その発展は、明治22（1889）年の東海道線全通にもない、綿織物の集散地が笠井から浜松に移ることで、「遠州木綿」や「遠州織物」の販路が全国拡大したことで、大正後期から昭和初期には全国の綿織物生産高の5～6%を占めるまでに至る。その後、繊維産業の発展を土台として、大手の紡績工場が進出する。明治29（1896）年、東京から帝国制帽株が誘致、明治33（1900）年には日本形染株の前身である木綿中形株が設立された。明治42（1909）年には、スズキ株式会社の前身の鈴木式織機製作所が創立される。明治21（1888）年山葉寅楠は山葉風琴製作所（後の日本楽器、現ヤマハ）を設立し、オルガン、ピアノなどの楽器製造で日本最大の楽器製造企業となった。浜松には大規模工場が立地し金融機関や織物業の産業組合が設立、動力の電氣化、ガス供給の開始など、これらを支えるインフラも整備されていった。

大正元（1912）年、浜松駅西部の伊場に鉄道院浜松工場が国鉄の拠点工場として誘致された。明治40（1907）年、現静岡大学浜松キャンパス付近に「陸軍歩兵第六十七連隊」が置かれた。大正14（1925）年、陸軍軍縮によっていったん解体するが、昭和3（1928）年「高射砲第一連隊」が再び置かれた。昭和元年（1926）年、三方原台地に「陸軍飛行第七連隊（現航空自衛隊浜松基地）」が設置されるなど、浜松が軍都へと変貌していく。

軍都からの離陸—先行産業の業種転換—

浜松の民間工場は第二次世界大戦を機に軍需工業化され、終戦後は工作機械産業とオートバイ製造に継承され発展する。昭和21（1946）年、本田宗一郎が陸軍で使用していた無線用小型エンジンを改良し、自転車に取り付けて走らせたのが浜松のオートバイ製造の始まりと言われる。本田は浜松市山下町の機械加工工場に本田技術研究所を設立（1948年）、さらに昭和29（1954）年、浜松市葵町の旧陸軍飛行場跡地に本田技研浜松製作所を設立し、ホンダの二輪生産の拠点としてオートバイの量産化を進め、後に自動車生産へと進出した。

一方、スズキは、大工から身を起こした鈴木道雄が木製織機から金属製自動織機生産へ移行し、企業規模を拡大し、精密機械の加工ノウハウを蓄積していった。その多角化戦略として昭和29（1954）年、鈴木自動車工業を設立、市街地南西の可美村高塚（1991年浜松市に編入）に工場を集積してオートバイ生産を開始、後に軽自動車生産へと拡大する。ヤマハは、昭和13（1938）年には陸軍管理下の軍需工場となる。当初は木製プロペラ製造であったが、最終的には金属プロペラ製造を行い発展する。浜松の工場は戦災に遭い、残った工場や工作機械は進駐軍に接収を受けた。昭和28（1953）年に接収が解除されると、工作機械の有効活用としてオートバイの生産を考えると、昭和30（1955）年、オートバイ生産部門としてヤ

マハ発動機を設立した。昭和30年代が浜松におけるオートバイメーカーの最盛期であり、上記3社以外にも35社が簇生する。

以上のように、先行産業の繊維機械産業と楽器機械産業は、敗戦を機に、後発産業としてオートバイ生産に業種転換を行い大きな変貌を遂げた。それにともない、浜松の産業構造は大きく転換する。これを第一の後発産業集積と位置付ける。第二の後発産業集積は後に詳しく説明するが、これがご当地B級グルメ「浜松餃子」とどのように関わっていくのが本稿の核心である。

産業集積による工作機械と第二次後発産業の発展

浜松では、戦争を転機に産業集積が発生した。産業集積についてイギリスの経済学者アルフレッド・マーシャル（1890年）は次の段階を想定する。特定の産業がある地域に集積すると、①その産業に独特の技能が地域の人々にとって常識となり、新しい技術などもすぐに共有化される。②良い仕事は正しく評価され、発明や改良がなされるとその功績はすぐに噂になる。③補助産業が発達し分業が進む。④その地区の需要量が大きくなり、高度に特化した高価な機械を使用できるようになる。⑤その産業に必要な技能労働者が得やすく、就業も容易なため、その地域の優位性がさらに増す。この仮説を浜松市に敷衍すると、オートバイ、楽器、織物業の発展に関連したプラスチック製品製造業、金属製品製造業、生産用機械器具製造業などがまず発展する。これを第二の後発産業集積と定義する。とりわけ重要なのが工作機械である。機械部門の発展は加工技術のコスト削減が最重要課題である。「機械を作る機械」「マザーマシン」の役割は大きく、産業集積地域では工作機械の発展が顕著となる。

平成22（2010）年工業統計表「市区町村編」データの産業分類（中分類）では生産用機械器具製造の中に工作機械が含まれるが、浜松市のプラスチック製品製造業、金属製品製造業、生産用機械器具製造業の事業所、従業者数、製造品出荷額等、これら3業種を合計した浜松市全体の事業所数比率は31.0%、従業者数は20.1%、製造品出荷額等は14.4%を占める。主要産業である輸送用機械器具製造業は、事業所数19.8%、従業者数33.7%、製造品出荷額等は45.1%となる。従業者数と製造品出荷額等に圧倒的な差がある。とりわけ輸送用機械器具製造業の製造品出荷額は45.1%と浜松市全体の輸送用機械器具製造業以外の産業の中でも群を抜いており、浜松の基幹産業といえる。上記3業種の事業所数は、浜松市全体の31.0%を占め、直接消費者に供給する単純製品ではないが、主要産業を下支えする重要な間接的役割を担っている。

産業集積論の発展と応用—浜松餃子の普及—

産業集積にともなう補助産業の発達には、オートバイ、楽器、織物業の後発産業として生産用機械器具製造業、つまり工作機械工業が発展した。これらの技術を基に、時代の流れと需要に応じて業種転換する場合がある。丸正自動車の場合、本田宗一郎が経営していた商会で働いていた伊藤正とその兄が、昭和13（1938）年に野口町で商会を設立する。昭和23（1948）年には上池川町でトラックの修理販売を開始し、同時に二輪車製造の研究にも着手した。昭和26（1951）年には本格的にオートバイの生産を始め、昭和28（1953）年には6,435台の販売を記録してホンダ、トーハツに続く業界3位となるまでに成長した。丸正自動車でバイクの設計・工務・資材・企画など担当していた請井由夫が30歳になった時、会社が倒産する。彼は、学んだノウハウを生かして下請け金型メーカー会社の東亜工業を興し再出発する。

請井は下請けに甘んじず自ら機械製造に着手し、昭和50（1975）年餃子自動製造機を開発した。翌年、食品機械商社3社と月間6台の販売の契約を結び、1号機を市場に送り出した。その後昭和55（1980）年に2号機を完成させたことを機に直販体制を敷き、販売路線の拡大に臨む。同時にパーツ販売とメンテナンスサービスを専門とするユーエス工業を設立し、機械の製造とユニット販売に専念する方針を取った。現在、餃子製造の専用機を販売している企業は日本に5社あるが、餃子製造機のみ扱う専門メーカーは東亜工業のみである。現在までの納入実績は国内外合わせて大型約1,000台、小型5,000台で、国内シェア1位である。

折しも東亜工業が餃子製造機を開発した1975年は、「餃子の王将」が大阪府内直営1号店を出店した年である。餃子の王将は1967年、京都四条大宮に1号店を出店してから次々に関西圏下に店舗を設立。1978年には関東地区での1号店を東京に設立、1980年には博多市に九州支社を、船橋市に工場を設置するなどインフラを整備した。「餃子の王将」の発展は高度経済成長期から1991年の安定成長期まで見られる。この時期は庶民の食生活も大きく変容する。この時期には、女性の社会活動への参加にともなう食のライフスタイルの変化で、外食文化が芽生え、台所は合理化・省略化され、加工食品・簡便食品などの手軽な食品が次々と登場する。ここで餃子がチルド餃子・調理済み餃子として一般家庭に浸透していく。このような時代を予見し東亜工業の餃子製造機械は、外食産業のみならずスーパーや食品製造会社を基礎として、間接的ではあるが消費者に餃子を供給する役割を担っていったと考えられる。すべては産業集積によって導かれた技術の集積と業種転換によるものであり、地域産業と食文化に係りを見出すことができる。

地域産業集積論からクラスター論への予察—「浜松餃子」の可能性—

浜松市は「ものづくりのまち」、「音楽のまち」などの異名を持つ。浜松市は2007年の政令指定都市へ移行することで総務省家計調査の公表対象都市となる。2008年の家計調査（餃子の購入金額）では宇都宮市の一強を揺るがす存在として一躍脚光を浴びる。両市は「餃子のまち」を争う二強だが、2011年の家計調査の餃子の購入金額は4,313円で浜松市が首位を奪った。家計調査の対象は小売店で購入した餃子に限定されていて、スーパーやコンビニで生か焼き餃子を買わない限り調査には反映されていなかった。東日本大震災後の消費低迷の影響もあったが、2位の宇都宮市に500円近く引き離す結果となった。

ところで、家計調査の対象である浜松市内の小売店で売られる餃子の多くは、浜松市にある餃子食品メーカー、

マルマツの餃子である。県内の大手スーパー、小売店、居酒屋、ラーメン屋などに日配用の冷蔵商品と業務用の冷凍商品を製造・販売しており、県内では圧倒的なシェアを誇る。1966年の創業以来、餃子の製造を行ってきたが現在は1日100万個の生産能力を有しており、この餃子は東亜工業の餃子製造機で作ら

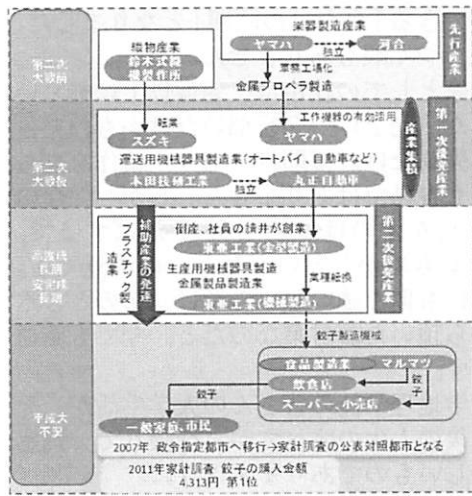


図2 浜松市における産業の系譜と餃子の関係

れている。偶然だが、浜松市の産業集積のフラグメントが地域の食文化を支える基盤となったことを考えると、家計調査で1位になったことも納得できる。

現在の浜松市は先行産業から産業集積にともなう後発産業の発達と業種転換を繰り返しながら今日に至り、「餃子のまち」としての認知度が非常に高い。それは、2007年の第2回B級ご当地グルメの祭典「B-1グランプリ」の出場をきっかけにマスコミに取り上げられ、注目を浴びることに始まる。この大会に出場した「浜松餃子学会」は民間任意団体で、現会長は地元の印刷会社社長である。直接餃子を提供する飲食店ではなく、学会が同業者団体の利益代表ではないことは注目したい。彼らのさまざまな活動が「餃子のまち浜松」を定着させたと言っても過言ではない。周辺の市町村と編入を機に浜松市の魅力を全国発信し、まちづくり・まちおこしを目的とした「浜松餃子学会」が2005年発足した翌年5月には浜松市内の餃子販売店情報を取りまとめた「浜松餃子マップ」を発行し、無料で掲載・配布を行った。現在の学会活動の中心もマップ作りだが、その財源は商標使用料としてののぼりとステッカーの販売益のみである。財源が限られているため、自らスポンサーを探しさまざまなイベントを行ってきたが、市の主導ではない。その目的はマスコミを利用した情報発信で、浜松市のPRと、観光客の流入を図ることである。行政、大学、メディア、観光協会などさまざまな対象を取り巻くことにより、ひとつの地域社会として連帯感が生まれてきている。

このような浜松市の餃子をめぐる地域連関は、カリフォルニアのワインを典型例にしたアメリカの経済学者マイケル・ポーターの産業クラスター論を適用できるのではないかと筆者は考える。クラスター論とは、特定分野における関連企業と専門性の高い供給業者、サービス提供者、関連業界に属する企業、連携機関（大学、規格団体、業界団体など）が地理的に集中し、競争しつつ同時に協力している状態のことである。産業集積との主な違いは、関連機関と企業の協力であり、産業クラスターの本質的な特徴である。

ここで浜松餃子をめぐる産業クラスターについて考えてみる（図3）。注目点は、餃子を提供する餃子店の競争が地域社会に好影響を与えていることである。価格、サービスの競争は勿論であるが、品質の向上と同時に浜松餃子のブランド化に繋がっている。さらに、「浜松餃子学会」が需要者と供給者、それに関連した企業、団体を結ぶコネクターの役割を担い産業クラスター論の構図が完成する。産業集積だけでは決して結びつくことの無かった、産業と文化をつないで地域社会の連携を見出す可能性を浜松餃子から垣間見ることが出来たと考える。

本稿では、浜松市における産業史から後発産業を2つに分けて論じた。さらに、食のライフスタイルの変容が後発産業である餃子製造機械の需要を高め、地域の食文化を育む母体となったことを指摘した。「浜松餃子学会」が地域の食文化を観光資源に変え、地域社会をつなぐアクターとして、産業クラスター論を援用して食文化と地域社会を予察した。ただ、多くの課題も残している。

今後、餃子製造機械メーカーの東亜工業へ聞き取り調査を行い、出荷台数や卸先など特定することにより、日本における餃子の普及を時代背景とともに考察したい。「浜松餃子学会」への聞き取りでは、戦前にも浜松では餃子を提供する店があり、浜松在住華僑の存在が1960年代以降の餃子普及の何らかの影響を及ぼしていることが推定される。今後、彼らがどのようなルートでいつから浜松にいたのか解明していきたい。

（本学大学院博士課程後期課程1回生）

【参考文献】

板倉勝高（1988）：『日本工業の地域システム』大明堂、256pp。  
 大塚昌利（1980）：「浜松地域における楽器工業の集積」地理学評論第53巻2号、pp.157-170  
 齋藤鮎子（2011）：「餃子から見る中国・日本食文化の融合と創造—宇都宮を中心に—」、関西大学大学院修士論文  
 竹内淳彦（1978）：『工業地域構造論』大明堂、232pp。  
 西原純（2008）：「浜松」（平岡昭利編『地図で読み解く日本の地域変貌』）海青社、pp.154-157。  
 アルフレッド・マーシャル著、馬場啓之助訳（1985）：『マーシャル経済学原理Ⅱ』東洋経済新報社、353pp。  
 マイケル・ポーター著、竹内弘高訳（1999）：『競争戦略論Ⅱ』ダイヤモンド社、355pp。

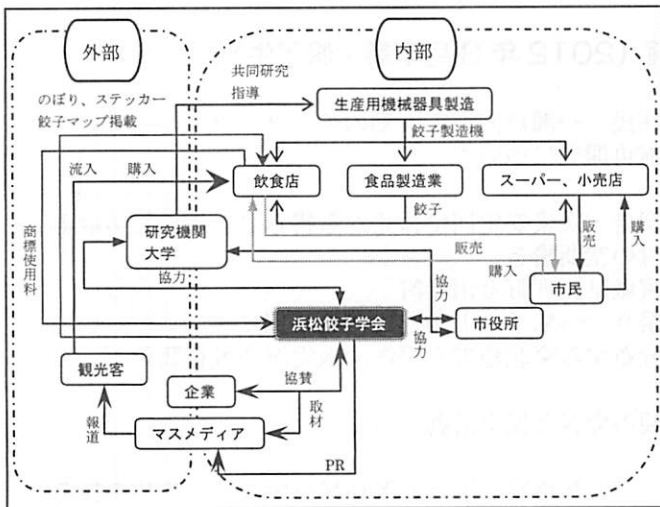


図3 浜松市における餃子をめぐる産業クラスター

西田みづき

好きな食べ物はぶどうです。伊東先生の知バスの楽しくて地理学を選びました。

廣瀬健太

はじめまして。香川県出身です。地理の高校教師になりたいです。そのために、知識を増やせれば良いなと思っています。よろしくお願ひします。

藤田美優

三重県出身。京都在住です。夏は無人島でキャンプします。フットワークは軽いので何でも誘ってください。よろしくお願ひします。

古川宏康

初めまして、古川宏康です。地理に入ったのは旅行が好きだからです。これから日本の歴史もふくめて勉強したいと思っています。よろしくお願ひします。

巻橋豆鈴

大阪府豊中市出身です。1回るとき授業がおもしろかったので入りました。まだ知らない事だらけですが、これからたくさん事を学んでいきたいと思っています。よろしくお願ひします。

安宮まいこ

はじめまして。発展途上国の支援や農地開発などに興味があったので地理学専修に入りました。また観光にも興味があります。よろしくお願ひします。

山本佳代子

奈良県出身で、今は兵庫県に住んでいます。写真を撮るのが好きなので、色々なところを歩きたいです。よろしくお願ひします。

山本知佳

こんにちは。大阪府堺市出身です。楽しいことが大好きです。地理学で色々なことを学びたいです。よろしくお願ひします。

周 颯昀

中国の蘇州出身です。地理とRPGが好きです。中二くさくて、どうしようもないオタクです。高校時代一年休学して、ゲーム雑誌につとめたこともある。

卒業生だより

欲張りであれ、鈍感であれ

中村 慎一

卒業は2004年。就職氷河期の終わり際によく掴んだ内定は、とあるIT企業のものでした。「システムインテグレーター (SIer)」と聞いてピンとくるはずもなく、しかし過酷な就職活動に疲弊した私はそれ以上の挑戦を諦め、その道を選ぶことを決意しました。大学では木庭元晴先生のゼミに所属、航空写真判読やパソコンを用いた地形図描画に明け暮れており、「細かいことを根気よく続ける素質はあるに違いない」という自負がありました。それゆえ、システムエンジニア (SE) の仕事はどちらかといえば自分に向いているのでは? と思うことになったのです。ただ、内定報告をしたときに木庭先生から頂いた「ここでやめなければ、君はもっと高いところ、良いところへ到達できるのでは?」というお言葉だけが、胸の奥に小さな違和感となって残りました。

社会人になってからは、毎日が未知との遭遇でした。知識と技術を習得しようと、必死でもがく日々。頭も身体もフル回転でしたが、やりがいはありました。しかし、ふとした拍子に気付くのです。木庭先生のお言葉が、心のどこかで熱を持って揺れていることに。

やがて仕事に慣れてくると、新たな視点、新たな刺激が欲しくなります。社内でそれを探す努力は怠りませんでした。が、なかなか実を結びません。——飛躍したい。とにかく、思いもよらないようなことを、してみたい——。発想の転換と、行動のきっかけがどこにあったのかは、今では思い出せません。気がつけば私は、小説を書いていたのです。

10万文字に及ぶ処女作を書き上げたとき、達成感と同時に思ったことは、果たしてこれは「もの」になるのか? ということでした。それこそ、知識も技術もない素人が書いた荒削りな代物です。面白いのかどうか、どこを直せば良くなるのか、それすら分かりません。しかし、心のどこかでは、こう考えていたのでしょう。「やめなければ、方向はどうであれ、今いる場所からは進むことはできる」と。

そして数年間の投稿時代を経て、私はとあるライトノベル新人賞からの「拾い上げ」という形で、作家として商業デビューを果たしました。もちろん、会社員を辞めたわけではなく、兼業作家としてスタートを切ったのです。作家仲間には兼業が多く、塾講師や店舗販売員、プロダクション勤務や大学講師、そして同業のSEなど、皆さまざまな仕事と執筆の両立をこなしていました。ところで私は投稿時代に結婚しており、子どもにも恵まれました。ここでも思ったことは、「やめない」こと、つまり、「子育てへの参加を諦めない」ことでした。

長時間残業が取り沙汰されるSE業界ですが、社内での根回しと仕事のコントロールを徹底すれば、定時退社はできる! そんな信念と強靱な「鈍感力」を身にまとい、課内でただ一人、毎日定時に席を立ち保育園のお迎えに向かいます。夕食を作って食べさせ、風呂に入れ、寝かしつけをして、園の汚れ物を洗濯して、明日の準備をする……。家事の選り好みはせず、ツマとふたり、できることをできるほうがする。そうして朝は四時に起きて、出社するまで原稿に向かいます。保育園に子どもたちを預けてから会社までの道のりが、唯一ひとりでものを考えることのできる「私だけの時間」となりました。毎日、息をつく暇もありません。

商業作家としての仕事は、想像以上に厳しいものでした。売上げ、発行部数だけがものを言う世界。売れなければ即打ち切り、新作を立ち上げるのも容易ではありません。しかし、今の私を突き動かすのは、「ヒットを飛ばすまで、やめてやるものか」というひとつの決意です。この意地にも似た強い想いの源は、あのとき木庭先生から頂いたお言葉なのだ、今でも確信しています。

関西大学地理学徒の皆さんの大学生活が、そしてその後の人生のすべてが、欲張りで、鈍感で、輝かしいものでありますように。(株式会社アイネス勤務、兼業作家:筆名「中村一」、本学卒業生)

卒業論文・修士論文一覧 (2012年3月卒業・修了生)

<卒業論文>

石田 夏樹  
井上 麻衣  
大成 美紗  
北窪友美子  
北脇 一馬  
橋谷 晴菜  
鯉沼 貴大  
小西 雅人  
佐々木幸枝  
妹尾 健裕  
田辺 麻希  
中辻 真央

志々島: 激動する生活世界と住民 一瀬戸内海志々島のモノグラフ  
北撰: ニュータウンの発展と駅前再開発について  
地下空間の利用形態について  
屋我地島南海岸潮間堆積物の窒素・炭素安定同位体比から得られた汚染拡散評価  
湖北地方におけるオコナイと村の空間構造  
東北地方太平洋沖地震による宮城県亘理町と山元町  
過疎・高齢化の中で変化する祭り 一鷲子山上神社例祭を事例に—  
宮城県亘理町および山元町に分布する東北地方太平洋沖地震津波堆積物の  
粒度分布と鉱物構成  
京都市檜原における歴史的景観の変容と保全活動  
灘のけんか祭りと地域社会  
天神橋筋商店街の変遷と現状 一天神橋筋三丁目と天神祭を中心に活性化を探る—  
沖繩島付属屋我地島南海岸の潮間低地のサンゴ礁



西川 紗世	水の都と大阪の発展
橋本 敬吾	紀の川右岸における灌漑水利システム 一 小田井を中心に一
春名 由貴	近鉄奈良沿線地域の変容 一 開通から現在まで一
古市 良太	鯖街道沿いの観光施設の現状と課題
堀川 三夏	歴史的町並みに触れる, ならまち 一 観光地化が進むならまち一
宮本 郁子	原田神社における伝統の継承とまちづくり
森 真澄	観光温泉地の変容と温泉利用の新しい動向 一加賀温泉三湯の比較から一
森島 宏美	宮島の町並みと景観保全
山田 翔太	石切劔箭神社参道の空間的特性 一 参道商店街を事例に一
山野千沙希	大阪ベイエリアの開発と咲州コスモスクエア地区のまちづくりについて
山本 奈緒	ファッション都市としての神戸
山本 浩貴	駒川商店街: 過去・現在・未来
項 磊	日本の自動車燃費対策とその将来

### <修士論文>

逸本茉莉子	現代における民話の場所性についての考察 一 山口盆地・関門海峡の観光との関連を中心に一
喬 成立	通年モニタリングによる都市河川北摂千里川に見られる河畔植生の季節区分
増田 妃	ベトナム・ハノイ都市民の生活世界 一路上茶店の参与観察から一

## 教室だより

### ■柿本先生がご逝去

柿本典昭先生が本年8月3日(金)、金沢市立病院で肺炎にてお亡くなりになりました。ご入院されて、翌日のことだったそうです。享年83歳でした。柿本先生は関西大学に昭和56年10月に赴任され、平成11年3月まで計17年6ヶ月在職されました。通夜、告別式には多数の教え子が駆けつけました。本年度千里地理通信春号(68号)には追悼号を出す予定です。つきましては、柿本先生の思い出をタイトルもお考え頂いて本文200字程度でお寄せください。一際教え子に慕われた柿本先生ですので沢山届くことを期待しております。また、柿本先生のお顔がはっきりと見える写真をお持ちでしたらお寄せください(必ずご返却致します)。

### ■学生数

平成24年度当教室新入生は、新2回生29名(男子10名・女子19名)、修士課程1年生2名(男子1名・女子1名)、博士課程1年生3名(男子2名・女子1名)であった。4月19日(木)には新入生歓迎コンパをフランススピーカーで開催した。学部生67名、大学院生15名(文化交渉学専修の大学院生1名を含む)の総計82名となった。

### ■春の一泊巡検

恒例の春の一泊巡検は、5月26日(土)、27日(日)に下記の要領で開催された。テーマ: 土山・関・亀山・伊賀上野の自然・産業・まちなみ・観光一甲賀から中勢・伊賀地域へ。参加学生: 地理学地域環境学実習を履修する3回生、それに2回生、修士課程1年生ほか。集合場所と時間: 8時30分集合、新大阪駅。コースの概略: 26日 JR新大阪駅、土山頓宮茶園、土山宿、鈴鹿峠、関宿(昼食)、亀山・関テクノヒルズ、鈴鹿市のマンボ、植木生産、伊賀くみひもセンター、伊賀上野城、サンピア伊賀(一次解散)、JR大阪駅付近(二次解散) 27日 宿舎マイク

ロバスにて出発、伊賀上野市駅前、伊賀上野市街地、帰路。引率: 実習担当者(伊東・野間)。参加者数52名、うち日帰りは33名であった。

### ■課程博士申請論文公聴審査会・学位授与

6月22日(金)16時30分～17時30分まで尚文館508教室にて、TRAN Thi Mai Hoaさんの課程博士申請論文Ecotourism Development in Japan and Possibility for Application in Vietnam: A comparative Study(日本におけるエコツーリズムの発展とベトナムへの適用可能性について一比較研究一)の、公聴審査会が行われた。その後、学位授与が正式に決定し、2012年9月18日には学位記授与式が行われる予定である。

### ■M・D中間発表会

7月14日(土)13時30分～17時10分まで地理学・地域環境学教室にて行われた。発表者は地理学専修から、舟越寿尚、小泉邦彦、竹下裕隆、徐 笠凡、張 瑩の5名、文化交渉学専修からは宋 琛の1名であった。

### ■教員の海外出張 2012年4月～2012年8月

伊東 理: 2012年8月20日～9月3日、イギリス、科研費によるイギリスの中心地の再生に関する調査。野間晴雄: ①2012年6月23日～29日、ベトナム、アジア文化研究センターによるフエ文書データベース化の予備調査・打ち合わせ。②2012年8月5日～12日、ベトナム・ラオス、野外歴史地理学研究会の海外巡検を主宰。③2012年8月21日～28日、中国、科研費による煙台・山東半島各地の調査。

### ■新任非常勤講師紹介

今年度新たに非常勤講師としてご出講いただいているのは、瀧端真理子(オープンリソース論)、山近久美子(M人文地理学特別研究・夏季集中講義)、吉田道代(M地誌学・地理教育研究B)の各先生方です。

張 一萍

中国の歴史が長い山東省で生まれて、そだてられて来ました。中学校から地理が好きで、旅行もよく行っています。今年の八月の夏休みにチベット行くつもりで、いろいろ計画しています。よろしくおねがいします。

## 新院生紹介

### 博士課程前期

牛 鎔

牛 鎔と申します。2006年の4月に日本に来て、今年の4月に関西大学文学研究科地理学・地域環境学専修に入学しました。歴史と車のことに興味があります。普段は関西大学中国人留学生組織の活動をやっています。よろしくおねがいいたします。

所 夏弥

関西大学地理学専修の一員として受け入れて頂きましたことを嬉しく思います。これからよろしくおねがい致します。

### 博士課程後期

齋藤鮎子

1年振りに戻ってまいりました。齋藤です。また関西大学地理学教室で学べることに喜びを感じています。博士課程後期課程に入学しました。今まで以上に勉強に励みますので、みなさんよろしくおねがいします。

張 旭

北京出身です。2008年4月から日本に留学してきました。歴史地理学を勉強するのは2010年のことでした。歴史地理に関心があるので高橋先生のもとで勉強しています。よろしくおねがいします。

張 立宇

中国北京市の出身です。今年から続けて高橋先生のゼミで研究します。趣味はいろいろで、現段階の目標は博士論文の完成です。よろしくおねがいします。

董 振江

中国大連市出身。中国東北部と日本の北海道の農業開発史と稲作社会について調査・研究しています。どうぞよろしくおねがい致します。

随想

# 地理学の経験を活かす —メビック扇町の現場から

堂野 智史

私は、学生時代、経済地理学を学びました。大学院修了後、シンクタンクに勤務し、14年間地域政策や地域産業政策に関連した調査研究・政策提案業務に携わりました。その後転職し2003年5月より現職に。大阪市経済局設置のクリエイティブ産業支援施設“メビック扇町”の所長として、大阪のクリエイティブ産業の活性化に向け、現場で考えたことを、日々試行錯誤しながら実践しています。

私の職場であるメビック扇町は、クリエイターのためのインキュベーション（創業支援）施設として大阪市経済局が2003年5月に設置しました。当時は、昭和初期に建設された古い水道局庁舎をリノベートして運営していました。2010年3月末に建物老朽化により取り壊しが決まり退去を余儀なくされましたが、1年後の2011年3月末に今の場所（扇町キッズパーク3階）に移転、再オープンしました。

新しくなったメビック扇町では、「クリエイティブクラスターの創生—デジタル化時代のクリエイティブコミュニティの再生」をテーマに、①クリエイターの情報発信、②クリエイターのネットワークづくり、③ビジネスの創出、④プロデュース人材の育成を軸に活動しています。

特に大切にしていることは、人と人との「顔が見える関係」づくり。具体的には、様々なジャンルの現役クリエイターにコーディネイト業務を委嘱し、メビック扇町スタッフと一緒に大阪のクリエイター・企業への訪問を繰り返し、新たに出会ったクリエイターや企業の情報をWEBサイト等で発信するとともに、“クリエイティブクラスターミーティング”という非公開で開催する、10人程度の少人数制座談会に招待し、クリエイター同士、クリエイターと他ジャンルとのコミュニケーションを深める機会を頻繁に創り出してきました。既に80回以上開催し、参加したクリエイターも延べ1,000人近くに達しています。

また、クリエイターの情報発信やネットワークづくりの活動をより一層拡充する手段として、様々なイベントや展示会も実施してきました。2012年2月と5月に東京と大阪で開催した『my home town わたしのマチオモイ帖』は、デザイン、出版、IT、映像、印刷など、多様なジャンルのクリエイターが集い、出会い、交流し、協働できる場として、計1万2千人を超える人々に参加いただきました。

メビック扇町では、地道な活動を繰り返すことで、人と人との小さな関係性が少しずつ増幅し、互いに刺激を



メビック扇町特別展『my home town わたしのマチオモイ帖』  
(2012/5/11～6/10)

受け与え合い切磋琢磨したり、不足する経営資源を相互に補充し合う、競争と協調の関係が生み出され、結果、クリエイター自身の自立・成長、ひいてはビジネス創出の源泉になるものと考えています。

こうした私の活動の原点には、学生時代に学んだ経済地理学が少なからず影響しています。クリエイティブクラスター構想における産業集積の捉え方や実態把握における調査手法、立地条件の整理、クリエイター・企業訪問時のヒアリング方法等など。学生時代の地域調査法や卒論・修論作成過程での経験が今でも生きているのです。

現場に出てみて感じたことは、「答えは現場にしかない。でも現場にも唯一の正解はない。」ということ。いくら理論的に正しく感じてても、現場に出てみるとそのとおりにはいかなかったり、理論的には何となく違和感を感じても実際現場で実践してみるとうまくいったりすることがあります。絶えず現場の状況をよく見ながら、ケースバイケースで手法や内容を変えていくことが大事であることを痛感しています。

メビック扇町は、今後もクリエイターが集い、情報発信とネットワークづくりを拡充し、互いに顔が見える良好な関係づくりを進めながら、新たな事業を創造する拠点として、継続してその役割を果たしていきたいと考えています。

(クリエイティブネットワークセンター大阪 メビック扇町所長／関西大学文学部非常勤講師)

千里地理通信 第67号

2012年9月20日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部 地理学・地域環境学教室内

編集担当：伊東 理 舟越寿尚

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：moto@kansai-u.ac.jp

郵便振替：大阪00970-4-81149